

1. (情報)「パワハラは究極の人災」／厚労省の過労死シンポ／遺族らが防止対策を訴え  
181110 連合通信・隔日版

厚生労働省は11月6日、過労死の防止を呼び掛けるシンポジウムを都内で開いた。11月の過労死等防止啓発月間に合わせ、昨年から全都道府県で実施。全国過労死を考える家族の会の遺族らが訴えた。

過労死防止全国センター共同代表の川人博弁護士は過労死事例を報告した。「高橋まつりさんが亡くなった電通過労死事件以降も、パワハラや長時間労働が原因と思われる痛ましい事件の相談が続いている。入社したばかりの若い青年に配慮を欠いた叱責(しっせき)が多い」と述べた。

一方、働き方改革の流れで、若手や新人の残業時間が削減されるものの、課長職などの残業時間が増加傾向にあると指摘。課長に昇進後、会社が労働基準法上の管理監督とみなして時間管理が甘くなり、亡くなったケースもあるという。有効な防止対策として勤務間インターバル制度を活用し、十分な睡眠と休息の確保することを求めた。

過労死で家族をなくした遺族が自身の体験と防止への思いを語った。

前田和美さんは2016年6月、息子の颯人(はやと)さんを20歳の若さで亡くした。颯人さんは高校卒業後、神戸の老舗洋菓子メーカーのゴンチャロフに就職。入社から2カ月後には「上司にあいさつしても無視される」「仕事を教えてもらえない」とこぼすようになったという。製造ラインの責任者になってからは、時間外勤務が月100時間を超え、昼休みもままならなかった。

チョコレートの製造に失敗すると廃棄品が牧場の飼料に回されるため、「また牛のえさを作った」と上司から罵倒されていた。夏のゼリーの販売が不調で、チョコレートの製造時期を早めると知った颯人さんは電車に身を投げた。

和美さんは「部屋にこもりがちになり、遊びにも出かけない。心配になって、会社を辞めたらと言ったら、激高された。辞めたら出身高校から採用しないと上司に脅されていたのです」と振り返った。

遺族は17年9月に労災を申請、今年6月に認定された。颯人さんを追い詰めた上司は「他の作業員に見せつけるために怒鳴った」と説明したという。和美さんは「なぜ息子は死ななければならなかったのか。今増えつつある究極の人災、パワハラは第二、第三の息子を生み出す」と声を震わせた。

全国過労死を考える家族の会代表世話人の寺西笑子さんは「過労死は職場で起きる人災。一人で防ぐことはできない。労働組合をはじめ職場全体で取り組んでほしい。働き方を改善すれば必ず防ぐことができる」と訴えた。

.....  
コミュニティ・ユニオン全国ネットワーク 事務局

(発行責任者：岡本)

136-0071 江東区亀戸7-8-9 松甚ビル2F 下町ユニオン内

TEL : 03-3638-3369 FAX : 03-5626-2423

E-mail : shtmch@ybb.ne.jp  
.....